

秩父市旧荒川村の《道引はやし》に関する構造人類学的考察

—神明社神楽の楽曲分析を中心に—

川崎瑞穂 (国立音楽大学大学院)

埼玉県秩父市の白久地域に伝承される「神明社神楽」について私は、2008 年以来、今日まで調査を継続している。修士論文でもこの芸能を中心に研究を行ったが、この芸能に注目するには 2 つの理由がある。1 つは、口頭伝承が豊富であることである。神楽伝承者への聞き取り調査の結果と考察は、2012 年 9 月 8 日、日本オーラル・ヒストリー学会第 10 回大会 (於・椋山女学園大学) において既に発表した (「神明社神楽の歴史と言説」)。

2 つめの理由として楽曲が豊富であるということがある。この芸能には 17 の演目があり、それぞれの演目に囃子が 2~3 曲付されている。囃子は計 22 曲 (屋台囃子を入れると 23 曲) あり、それぞれ全く異なる曲が 22 曲も用いられる事例は、関東の里神楽においては非常に特殊であるといえる。本発表ではまず、これらの楽曲を分析し、その相互連関を示す。

分析方法としては、旋律概形線を折線グラフで示し、共有されている音型を抽出するという方法を用いる。この方法によって全楽曲を分析した結果、それぞれの曲が音型を共有しあっていることがわかった。また音型の含有量比から、《早ふゑ》《道引はやし》に、これらの曲に共有されている各音型のほとんどが組みこまれているという結果を引き出すことができた。これはあるいは、《早ふゑ》と《道引はやし》が、楽曲全体の母体的な存在であることを示唆しているのかもしれない。

さらに興味深いことに、隣接する地域に伝承される「甘酒まつり」では、この《道引はやし》のみを演奏する習慣があり、荒川の対岸の地域に伝承される「日向の獅子舞」における道引の囃子は、この《道引はやし》に類似している。この獅子舞の他の楽曲は神明社神楽とは全く異なるものであるだけに、この特殊性は顕著である。なぜ旧荒川村の各地で、神明社神楽の母体的楽曲たる《道引はやし》が共有されているのか、本発表ではこの現象について、構造人類学的視点から考察を加えたい。